

それは、何から始まったのだろう。

思い返せば、彼女の一言が誘発したものだったような気がする。

彼女とホテルでいたしていた時に、こっぴどいんだ。

「恥ずかしいから灯りを消して。」と。

彼女とは、体の関係になつてからかなり経つ。

お互いの体を重ねた回数だつて、二桁か三桁になるかといった、慣れ親しんだ間柄だ。

どちらかの部屋でという事はあまり無く、大抵はホテルの一室で愉しむことが多い。

もちろん、お互いに全裸になり、体に触れ合い、唇を重ね、手で、時には唇で、お互いの秘所を刺激し、陰茎を膣に挿入し、快感を高め、絶頂にまで達する。

そんな関係を何度となく繰り返しているのに、「恥ずかしい」という言葉が出てくるのは、僕にしてみれば意外だった。

その日は、初めて行ったラブホで、行為に及ぼうとしたのだが、いつもの場所よりも照明が明るく、スイッチの位置も解り難く、面倒なので、そのまま行為に移ろうとしたのだ。

考えてみれば、今までは薄暗い灯りの下で、半ば手探りのように、相手の体にコンタクトしていたのだから、こうして、明るい照明の下で、彼女の体を眺めた記憶は無い。

それでも、こっぴどいて体の関係で馴染んでいるのに、いままさ、見られるのが恥ずかしい、という女性心理は、なかなか理解が困難だった。

その日は、彼女の要望通りに、照明を落として交わったのだが、それ以降、彼女のその言葉は、僕の心の片隅に引っかかっていた。

体を見られるのが、性行為よりも羞恥を刺激するなら、その究極は、どこにあるのだろうか。

たとえば、ヌード写真やAVの撮影などで、裸体にカメラを向けられたらどうだろう。

下着姿だったり全裸だったり、あるいはAVのように性器までむき出しにされ、男性器を挿入されるシーンまで、画像に残されたら。

普通の性行為よりも激しい羞恥に陥るのだろうか。

それよりも恥ずかしい行為は有るのだろうか。

あれこれと妄想を巡らせた挙句に、僕は一つの結論に思い至った。

医師が診察をする時には、胸を出せと言われれば胸を晒し、婦人科で秘所を診察される時には、一番見せてはいけない場所を、しかも体の中まで、器具を入れられ覗かれる。

泌尿器科にしても、肛門科にしても。患部の診察では、その部分をしっかりと、しかも明かりで照らされて、観察されるのだ。

そして、病氣治癒の為という大義名分で、それは正当化される。

そんなことを考えると、彼女にそうした行為を試してみたいという欲求が、ぼんやりと湧いてきた。

だが、それを彼女に告げれば、当然のように拒否されるだろう。

それだけならまだしも、通常の性行為まで拒否されるかもしれない。

関係を壊したくはない。でも、やってみたい。

そんなもやもやとした思いを、僕はいつからか抱え込んでしまうようになっていた。

それは、ある日の何気ない時間が、きつかけだった。

僕の部屋で、テレビでサッカーの試合を二人で観ていた時に、彼女が言い出したことだ。

「ねえ、この試合、どっちのチームが勝つと思う。」

僕の出身地のどちらかと言えばリーグ内の弱小チームと、都市部の大応援団を率いたチームの試合だった。

僕はもちろん、出身地のチームの名前を出した。

「そうかな。どう考えても相手の方が強そうだよ。」

「サッカーなんて一点とか二点の勝負だから、判らないよ。」

「じゃあ、賭けをしようか。」

「何を。」

「負けた方が、勝った方の願いをひとつ聞く、なんていうのはどう。」

「いいよ。どんなことでも良いのかい。」

「もちろん。なんでも良いわよ。」

「何を狙ってるんだい。」

「私ねえ、」ホテルのケーキバイキングに連れて行って欲しいの。」

「この前言ってたやつだね。値段も高いし、ケーキなんかそんなに食べ放題って言われても、食べられないからって、嫌だつて僕が言ったやつ。」

「だから、あなたと一緒に行ってみたいの。」

「いいよ。解った。君が勝つたら一緒に行こう。」

「もちろん、あなたの奢りでね。」

「で、僕が勝つたら。」

「なんでもいう事きいてあげるわよ。」

「ほんとに何でも。エッチな事でも良いのかな。」

「良いわよ。一度だけね。エッチな事でも何でも。」

そんな会話の後で、試合の続きを観ていたのだが、試合はゼロ対ゼロのまま、終了しそうだった。

「このまま引き分けだったら、勝負は無したね。」

そう言った矢先、僕の応援するチームのフォワードが、ペナルティーエリア内で倒された。

きわどい判定だったが、審判はPKを指示し、見事にそれを決め、そのまま試合は終了し、僕の勝ちが決定した。

<https://www.spaceinga.com/>

SPACE 銀河



「ああ、惜しかったな。ケーキバイキング、行きたかったのに。」

「残念だったね。まあ、サッカーの試合なんてそんなこともあるさ。」

「それより、あなたの望みは何なの。」

「どうしようかな。次の時までを考えておくよ。」

その晩は、一緒にご飯を食べて、普通に過ごしたのだが、僕の頭の中では、願いの具体的なビジョンが渦巻いていた。

基本は「お医者さんごっこ」だ。

医師として、彼女の体を明かりの下で診察し、彼女が、恥ずかしがる姿を堪能するのだ。

その時の為に、いくつかの道具もアダルトショップで手に入れた。

そして、その日がやってきた。

いつものように二人でラブホの一室に落ち着くと、彼女をベッドに掛けさせる。

「ねえ、本当に願い事を聞いてくれるんだね。」

「もちろん良いわよ。女に二言は無い。

でも、あんまりひどい事しないでね。

縛ったりとか鞭で打ったりとか。」

「そんなことはしないよ。でも、ちよつと恥ずかしいかな。」

「なにをするつもりなの。」

「ヌード写真の撮影会なのはどう。」

AVみたいにあそこを。バックリ開いて顔も一緒に写すなんて、

一生の記念になるよ。」

「ええ、あそこを写真撮るの。その画像はどうするのよ。もしもデータ流出なんて起こったら、一生世間に残っちゃうのよ。」

「じゃあ、撮影は無しで、お医者さんごっこかな。」

「それなら良いかな。」

「じゃあ、今日はホテルを出るまでは、僕が医師で、君が患者だよ。」

「はいはい、ドクター。」

「きちんと訊かれたことには正直に答えて、言われたことには、素直に従うんだよ。」

言いにくいことも、恥ずかしい事でもね。」

では、これから診察を始めます。」

僕はそういうと、手にしたバッグから、聴診器とペンライトを取り出した。

「なんだ、最初からそういう小道具も用意してたのね。」

「カメラも用意してあるんだけどね。」

「ヌード撮影か、お医者さんごっこか、どちらかがやりたかったのね。」

「そう、この前、『灯りを消して』って言ったじゃないか。」

明るいうところで、君の体をじっくり観てみたいと思ってるね。」

「いやね、そんなこと。恥ずかしい。」

「そうやって恥ずかしがる姿も可愛いよ。」

今日はもつと恥ずかしいこと、してあげる。」

そして僕は、医師になりきって診察を開始した。

もちろん、医学的な知識など無いから、真似だけだ。

最初にスタートの合図のように、まぶたを下げて、眼の様子を観る。

口を開けさせ、喉の奥にペンライトの光を当て、覗いてみる。

でも、僕の狙いがそんな部分じゃないのは、彼女も解っている。

「では、次は内科の診察です。ブラウスとスカートを脱いでください。」

彼女は、その言葉に素直に従う。



下着まで脱がされる覚悟をしていたのだろう。

なんだか安心したような表情になる。

「腕を上げて、腋のリンパ腺を観ます。」

医師でもない僕に、リンパ腺の良し悪しなど解るはずもないが、これは彼女に触れる口実なのだ。腋というのは、処理をしないと毛が生えるし、汗も溜まるから腋臭も発生しやすい。

「きれいにムダ毛処理してますね。」

顔を近づけ、その部分をしっかりと観察し、ついでに鼻も近づける。

「衛生的にしているようで、香りも良いですね。」

そんなことは当然の事なのだが、改めて間近でムダ毛や腋臭を確認されるのは、やはり恥ずかしいのだろう。ちよつとだけ頬が赤らむ。

「では、次は胸の聴診です。ブラジャーを外しますね」

僕はそう言うと、彼女が抵抗も出来ないうちにホックを外し、肩紐を腕から抜き取ってしまう。

これで、彼女の上半身は何も着けていない状態で、明かりの下に晒されてしまった。

思わず手で胸を隠そうとする彼女を制し、聴診器を胸に当てる。

本当の診察なら、心音や呼吸音を聴くのだろうが、僕の目的は、性的な羞恥を煽ることだ。

柔らかな乳房を撫でまわすように聴診器を当て、特に乳首は入念に刺激を与える。

「おや、乳首がちよつと大きくなってきましたね。」

こつやつて弄つてやれば、乳首が勃起するのは解っていることなのに、わざとそんな言葉を口にすると、彼女はその言葉に反応し、さらに羞恥の表情を浮かべる。

それと同時に、性的な興奮も高まって来ているのだろう。

鼓動も高まり、口も微かに開き、視線を泳がせている。

僕は聴診器を置き、大きくなった乳首を親指と人差し指でつまむようにして、さらに刺激を与える。
彼女の口からわずかにかすれた声が漏れる。

「そんなことされたら感じちやう。」

「まだ診察の途中ですからね。」

わざと冷たい口調で医師のようなセリフを言ってみる。

「次は腹部を診察しますから、そこに横になってください。」

ショーツ一枚だけの彼女の体が、ベッドの上に横たわる。

羞恥も興奮も感じているのだろうが、腕は自然に体の横に置き、胸を隠そうとする様子はない。

僕は、聴診器で臍の周りの音を聴くふりをする。

「腸の動く音が小さく聞こえますよ。お腹の調子はどうですか。」

医師の問診のような口調で、そんなことを訊くと、

「まあ、困らないくらいには…」

などという返事が返ってくる。

「ちよつとお通じが、途切れがちなのかな。」

「まあ、時々、数日無いこともあります。」

と、本当の医師に答えるように話してくれる。

「今日はどうですか。」

「昨日は少しだけ出たけど、今日はまだです。」

ちよつと恥ずかしそうに、そんな答えが返ってくる。

僕は、心の中で快哉をあげる。

この後で、医療処置をする口実を、一つ手に入れたのだ。

しばらくお腹の部分を聴診器で撫でまわした後で、いよいよ次の診察の宣言をする。

「では、次は婦人科の診察です。ショーツを下げますよ。」

さすがに、怯えた表情は隠せないが、お医者さんごっこを始めた時から、こうなることは想像できていたのだろう。いまさら抵抗することもなく、僕がお尻の部分に手を回すと、腰を浮かせ、最後の一枚を足首から抜き取るのにも逆らわない。

「じゃあ、膝を立てて、足を開いてください。」

僕がそう言つと、さすがに自分からそのポーズにはならず、躊躇いを見せる。

「ほんとに。こんな明るいところで、あそこを観るの。」

「そっだよ。僕はお医者さんなんだからね。」

明るいところで診察するんだよ。」

「でも…恥ずかしい。」

「医師の診察なんだから、恥ずかしいなんて言つてちやダメだよ。」

僕は、彼女の膝を上げ、膝の裏側に手を回させ、赤ちゃんのおむつを替えるようなポーズにさせる。

彼女のその部分は、もう馴染みの場所のはずなのに、こうして明かりの下で、一方的にじっくりと観察するなど初めての事だから、僕の手も震えそうになる。

彼女も、こうして観られることで、いつもと違う異常な興奮を覚えているようだ。

周囲の毛をかき分け、ゆつくりと陰唇を押し広げると、陰核が目の前に見えてくる。

裂け目から潤滑液が滴り落ちそうなのに、膣口も湿っている。

僕は、その陰核を優しくむき出しにすると、指先で刺激を与える。

「この部分が陰核と呼ばれるところですね。」

一番敏感な性感帯と言われています。

感じますか。」

「は、はい。どうしても気持ち良いです。」

「人によっては、陰核の刺激よりも、膣に挿入される方が性感が高い人も居るといことです。

あなたは、どちらの方が感じやすいですか。」

「あ、あの、どちらも感じます。」

「じゃあ、実際に膣の中にも刺激を加えてみましょう。」

そう言うと、僕は鞆の中から新たなツールを取り出した。

この日の為に、アダルトショップで手に入れたもので、アヒルのくちばしのような形の道具だ。

「これが何だか解りますか。」

彼女も、何かでそういうツールの知識はあつたのだろう。

一瞬、驚いた様子を見せる。

「それを、使うの。」

「そうですよ。痛くはありませんからね。」

これを膣に挿入して、内部の様子を観察します。」

「そんな処まで観られちゃうのね。」

「診察ですからね。」

彼女は躊躇う様子を見せるが、陰核への刺激で、すでに膣内はぐしょぐしょに濡れていて、潤滑剤など使わなくても、器具が容易く挿入出来るくらいになっている。

「では、膣鏡を入れますよ。」

僕はそう宣言すると、手にした器具を彼女の体内にゆくりと挿入した。

「痛くはないですね。」

「はい、でもちよつと怖い。」

「大丈夫ですよ。これから膣鏡を拡げて、中の様子を観ますね。」

僕がハンドル部分のねじを回すと、アヒルのくちばしがゆくりと開き、内臓が見えるようになっていった。

手にした。ペンライトで、奥の方まで照らして覗き込む。

「子宮の入り口まで見えていますよ。」

「こんな処まで観られている気分はどうですか。」

「いやだ、恥ずかしい。そんなところまで…」

「でも、しっかりと濡れてますね。恥ずかしいけど感じちやつっているのかな。」

「だって…」

「じゃあ、こちらの方の感度も確かめてみましょう。」

僕は、膣鏡で押し広げられた部分に指で触れ、子宮の周辺を刺激してみる。

彼女の喘ぎ声が大きくなる。

「やっぱり、膣の中でも感じるんですね。」

「こちらとどっちの方が、快感が大きいですか。」

そんなことを言いながら、もう片方の指で、陰核をつまむようにして刺激する。

「やだ、そんなに両方責められたら逝っちゃう。」

「これを抜いて、あなたのモノを入れて欲しいの。」

彼女はもう、お医者さんごっこから、完全に逸脱して、セックスプレイになってしまっている。

僕は、彼女のその部分に顔を近づけ、指でなく舌で陰核を舐る。

舐めまわすようにしながら、陰核の下の尿道口を舌先で拡げる。

「こちらは、婦人科じゃなくて泌尿器科の担当分野ですね。」

おしこの出てくる穴ですよ。」

「そんなとこ、舐めないで。」

「じゃあ、こちらの方が良いのかな。」

僕の舌は、陰核と膣口を往復し、どちらにも刺激を与え続ける。

「お願い。舐めるだけじゃなくて、アレを入れて。」

「そんなに感度がアップしてるんですね。」

それでは、別のセンサーを入れて、膣の締付強度の確認を試みましょう。」

彼女は、次に何をされるのか、不安気な表情を浮かべる。

僕も、彼女のこんな姿を観ていつも以上に興奮している。

当然、陰茎も最大限に勃起して硬度も最高だ。

それをおもむろに取り出して、彼女に見せる。

「膣鏡を抜いて、このセンサーを挿入します。」

これで、締付強度を測定しますね。しつかり力を入れてみてください。」

彼女は待ちきれないように、僕の陰茎を受け入れ、自ら腰を動かし、快感に浸っている。

僕は、なるべく腰を動かさず、彼女の反応を冷静に観察したが、彼女は快感をむさぼり、間もなく絶頂に至ってしまったようだった。

まだ硬さを保ったままの僕の陰茎が、彼女の膣口から、ポロリと吐き出される。

彼女は、呼吸を荒くして目を潤ませている。

「気持ち良かったですか。」

「はい、恥ずかしいくらいに凄く感じちゃいました。」

「それは良かったですね。それでは診察を続けます。」

「まだ、お医者さんごっこをするの。」

「次が最後の診察です。うつ伏せになって、お尻を上げてください。」

「バックスタイルね。もう一回、挿れてくれるの。」

「入れてあげますよ。診察の後にね。」

「診察って、今度は何をするつもり。」

「次は肛門科の診察です。」

「やだ、お尻の穴を診るの。指とか道具とか入れたら、汚れちゃうわよ。」

「大丈夫。診察前の処置もきちんとしてますから。」

そして僕はおもむろに、バッグからピンク色のかわいい形の、小さなツールを取り出し、彼女に見せた。

「これが何か、知っていますか。」

彼女の表情が引き攣る。

これがどういうものなのか、知っているという事なのだろう。

僕は重ねて訊ねる。

「どういふもので、どういう使い方をするか、解りますよね。」

「それは…かんちようでしょう。それを私にするの。」

「そうです。肛門の診察の前に、中をきれいにしておかないとね。」

それに、肛門科での痔などの診察では、排泄する時に、肛門の脱肛状態なども確認しなければなりません。」

もちろん、そんなのは口から出まかせだ。

でも、それを否定する知識など、彼女には無いだろう。

僕は、自分の手で彼女に浣腸をして、排泄する姿を、目の前で観察するという口実を手に入れたのだ。

「うんちするところまで観られちゃうの。そんなのヤダ。恥ずかしい。」

「医師の言うことには、全て従うって約束しただろう。」

医師の診察なんだからね。恥ずかしくても必要なんだよ。

それに、今日も便が出てないんだろう。

きちんと出さないと、便秘が酷くなっちゃうし、肛門が切れて痔になっちゃう可能性もあるよ。

それをしつかり確かめてあげるからね。」

僕は、わざと医師のような冷静な口調で告げると、彼女の肛門に指を這わせ、臆から滴り落ちている潤滑液を、肛門に塗り込んだ。

彼女は、戸惑いを隠せないが、抵抗するでもなく、僕のなすがままになっている。

僕は、おもむろにイチジク浣腸の嘴部を、肛門に突き立てた。

そのストローのような先端は、何の抵抗も示さず、肛門に吸い込まれた。

「ちよつと冷たいかもしれませんが、お薬を入れますね。」

僕はそう告げると、ゆつくりと、しかし確実に、イチジク浣腸を押しつぶし、中の薬液を、彼女の腸内に注ぎ込んだ。

「あつ、何か入ってくる。変な感じ。」

僕は、空になったイチジク浣腸を肛門から抜き取り、そのままの姿勢の彼女の陰核に、再び指を伸ばす。

「ああ、また気持ち良くなつちやう。」

「じゃあ、また気持ち良い診察をしましょう。」

お薬が効くまでしばらく時間がかかりますから、それまで、先ほどの膣圧測定 of 続きです。」

そう言つて、後背位で陰茎を膣に挿入する。

「浣腸が効いてきて、便意が強くなつても、ギリギリまで我慢しなきやダメですよ。」

限界になつてもう無理つてなつたら、排泄できるようにしますから、それまではこのままで待つていきましょうね。」

「限界になつたら、トイレに行かせてくれるの。」

「いや、排泄時の肛門の動きを観なければいけません。」

「この洋式トイレでは、肛門からの排泄が見えませんが、お風呂場でしゃがんで、洗面器にします。」

「ええ、そんなのヤダ。」

ウンチするところまで観られるなんて、恥ずかしいよ。」

「これは診察ですからね。」

医師の指示には、どんなことでも従つてもらいますよ。」

そんな会話を交わしながらも、僕は彼女の体に挿入した陰茎を動かし続けている。

彼女も、再び快感が高まってきたようで、喘ぎながら腰を動かしている。

「ねえ、今までに浣腸したことってあるの。」

思わず、彼女にそんなことを訊ねてしまう。

「小学生の頃ね。便秘でお腹が痛くなって、お母さんにかんちようされたの。」

ベッドでスカートとパンツを脱がされて、イチジクかんちようを入れられちゃった。

まだ二年生くらいだったから、たぶん子供用ね。」

「それで、トイレに行つてウンチしたのかな。」

「そう、ベッドでお尻の穴を押さえられたままで我慢させられて、もう無理つて泣きだしそうになって、トイレに連れて行つてもらったの。」

「トイレに着いたら、すぐに出ちゃったのかな。」

「そう、しゃがみ込むのと同じくらいにね。」

それでね、その頃住んでたお家は、和式のトイレだったの。

入つてそのまま、ドアの方にお尻を向けるタイプの。

だから、お母さんがお尻の穴を押さえたままで、一緒にトイレまで来てくれて、ドアを開けたまま、指を離すと同時にジャーンと出ちゃったの。」

「なんだ、もう僕が診るよりもずっと前に、そんな経験をしてるんだ。」

「だって、小学生の頃だよ。してくれたのはお母さんだったし。」

「今夜も、それと同じようにしてあげるよ。」

「もう、大人になつて、そんな事されるなんて、凄く恥ずかしい。」

どうしても、出すのを観るの。」

「そう。君が恥ずかしがる姿が素敵だからね。」

羞恥の極限まで味合わせてみたいんだ。」

そんな思ひ出話を聞いているうちに、彼女の体内の薬の効果が出始めたらしい。

腰を振る運動が、性感だけでなく、別の衝動も混じつたような小刻みな動きに変わってくる。

そして、僕の陰茎も新たな刺激を感じていた。

便意を堪えるのに肛門を絞めれば、同時に膣も締め付けられる。

先ほど、締付強度確認と言って挿入した時よりも、明らかに強い力で締め付けられている。

それと同時に。腸と膣の間の、薄い隔たりを通して、腸がグルグルと動く蠕動が、陰茎で感じられるのだ。

不随意的でヒクヒクとした動きが、僕の快感を一気に高めていく。

「浣腸しながら挿入すると、こんなになるんだね。

とつても気持ち良いよ。」

「私も、自分のアソコが壊れそうなくらい気持ち良いの。

ウンチを我慢しながら、あそこに入れられているのつて、お腹は苦しいけど、アブノーマルな気分で、とつても興奮しちゃう。

それに、あなたのモノもいつもより大きくて硬いような気がする。」

「このままで、君の中に出しちゃいそうだけど。」

「出しても良いわよ。今日は大丈夫な日だから。

そういう日だから、こんなホテルに来てるんだもんね。」

その状態で、陰茎の動きも激しくなり、僕の左手の指は、陰核を探り、そこを強く摘み上げ、右手は乳首に伸び、このまま二人とも絶頂を迎えそうだった。

だけど、その直前に、彼女の腸の中のものが、限界に達してしまった。

「気持ち良いけど、、もう漏れそう。」

ベッドの上で、ウンチを漏らすわけにはいけないので、僕はまだ硬くいきり立っている陰茎を膣から抜き、肛門を指で押さえた状態で、トイレとバスルームの有る方に向かう。

そして、トイレではなくバスルームのドアを開けると、彼女をそちらに誘導した。

「もうダメ。もうすぐ漏れる。本当にここでするの。」

僕が彼女をしゃがませ、お尻の下に洗面器を入れると、もう限界を迎えているはずなのに、まだ彼女は抵抗を

示す。

「そうだよ。観ていてあげるから、僕の目の前で出してごらん。」

「ああっ、恥ずかしい。どうしても観るの。」

僕はちよつと考えた。

もちろん最初の計画では、彼女の肛門から便が出るシーンまで見届け、彼女に強烈な羞恥を与えるつもりだった。

でも、それを観たところで、僕の陰茎の快楽にはつながらない。

彼女の排泄後に、改めて膣に挿入して射精するか、あるいは肛門性交を試みるか、どちらかだろう。

彼女もすでに、一度は絶頂に達しているし、強制的な排泄の後では、膣も肛門も脱力しているだろう。

そこに入れるよりは、さつきから感じた強烈な締付と、腸から伝わってくる痙攣のような震えの方が、快感を得るためには魅力的でもある。

「そうだね、今思いついたんだけど、僕の目の前で出すのと、僕に跨って、入れられたままですると、どちらが良いかな。」

「そんなの、どっちも恥ずかしくて嫌。」

「どちらかを選ぶんだよ。君の選んだ方法で出させてあげるから。」

「じゃあ、入れたままの方が良いかな。」

「どうせここで出すんなら、観ていられるよりは、まだマシだわ。」

「じゃあ、僕に抱きつくような体勢で、もういちどこれをあそこに入れてごらん。」

僕は浴室の椅子に腰かけ、彼女を正面から抱く。

彼女は、僕の太腿の上に跨り、僕のそそり立った陰茎を、膣に自分で迎え入れる。

僕の上げた太腿の下に洗面器をセットすると、ちょうど彼女の肛門の下になり、排泄物を受ける。ポジションになった。

彼女はまだ便意を我慢しながら、陰茎の刺激を味わっている。

僕にも、先ほどの締付と蠕動の快感が再び訪れる。

目の前には、彼女の乳房があり、僕は口に乳首を含み、舌先で転がすように、そちらにも刺激を与える。

先ほどの絶頂の余韻が、まだ体に残っているのだろう。

彼女は、激しく腰を動かし、快楽を貪る。

ほどなく、三つの出来事が、ほぼ同時に起こった。

彼女の喉から、悲鳴のような声が漏れる。

「ああっ、逝く。出る。」

両方の瞬間を同時に迎えそうになっているのだ。

彼女が、再び絶頂を迎え、全身を痙攣したように震わせた。

その震えが落ち着いたのと同時に、彼女の肛門を絞めつける力が抜け、我慢していた便意が解放された。注入された浣腸液と、それに続く便が、激しく放出され洗面器を叩く。

肛門と膣が連動し、緊張と緩和を繰り返しながら、僕の陰茎を締め付ける。

そして、便の流出する感触と腸の蠕動は、薄い肉壁を隔てて、僕にさらなる刺激を与える。

そして、僕も興奮の限界を迎え、白濁した精液を、彼女の体内に放出してしまふ。

しばらくは、そのままの抱き合った体勢で、彼女の排泄が落ち着くのを待った。

彼女の荒い息遣いが、次第に落ち着きを取り戻してくる。

彼女は、性感の絶頂と便意からの解放で、半ば虚脱状態になっている。

僕は、陰茎を挿入したまま、崩れ落ちそうになる彼女を抱きしめ、彼女にキスをしながら、余韻を味わっていた。しばしの時の後、そと彼女を抱きかかえ、お湯の張つてない浴槽内にもたれかからせる。

「おしっこも出ちゃう。」

「いいよ、そのままでもいい。シャワーで流してあげるから。」

彼女は素直に僕の覗いているままで、お尻を浴槽についたまま、膝を立てた状態で、尿を迸らせる。

尿道口から噴出するのを、直接観ることが出来るポジションだが、もう排便までしてしまった彼女は、羞恥心も麻痺しているのだろう。

僕が、その部分を注視しているなかで、排尿をしよう。

僕は、トイレからペーパーを持ってきて、彼女の肛門を拭いてあげ、洗面器の中に溜まったものと一緒に、トイレに流す。

浴槽の底には、彼女の尿が流れているが、シャワーでそれを流し去り、全身汗や分泌液などで濡れている彼女の体にも、たつぷりとお湯をかけてあげる。

床には、洗面器に納まりきらなかつた飛沫が飛び散っているが、それもシャワーで洗い流す。

浴室内に、かすかに排泄の名残りの香りが漂うが、これで、今までの僕らの行為の痕跡はほぼ片付いたことになる。

彼女を浴槽内で立たせ、もう一度たつぷりのお湯をかけ、膣から流れ出してくる僕の精液も、その部分にお湯をかけ、残らず洗い流すようにする。

そして、彼女の体を、首から乳房、尻、膣、肛門と太腿、ふくらはぎ、爪先まで、ボディソープで丹念に洗ってあげる。

もちろん、僕の体も、陰茎を含めて全身を洗い清める。

肛門や膣口に、ボディソープで滑らかになった僕の指が触れると、そこは、弛緩して柔らかくなっていて、指先どころか指の根元まで、抵抗なく侵入できそうな感触だ。

このまま、指での刺激を行い、第二ラウンドに突入することも考えたが、彼女にしてみれば、浣腸、排便、排尿と続いて、さらに刺激をされるのは、限界を超えてしまうかもしれない。

僕は、彼女の全身を洗い清めることに専念する。

彼女はまだ放心状態で、僕にされるがままになっている。

タオルで体を拭き、二人でベッドに戻り、並んで横になる。

「どうかな、お医者さんごっこの感想は。」

「とつても恥ずかしかったけど、凄く興奮して感じちやつた。」

「続きをもつとやつても良いんだけどね。」

「まだ、続けるの。次は何をするつもりなの。」

「そりゃあ、お尻の穴の中が綺麗になったんだから、指を入れたり、中を覗いたり、あれこれとできるよ。膣圧測定のように、肛門の締付強度測定でもね。」

「それつて、あなたのアレをお尻の穴に入れるつてこと。」

「アナルセックスつていうのをしてみたいのね。」

「もしも、君がして良いつて言ってくればね。」

「今日はもう駄目。そんな元気は残つてないわ。」

「それにあなただつて、私の中に出しちゃつたでしょう。」

「それで、今日は終わりにして。」

「まあ、それでも良いかな。」

「今日は、つてことは、この次もあるつてことかな。」

「そうね。こんなこと、毎回するような遊びじゃないから。」

「そのうちに、また今日みたいな快感を味わつてみたくなつたらね。」

「そんなに特別な快感だつたのかな。」

「だつて、かんちようされてウンチをするんだよ。」

「それもあなたに抱かれながら。」

「普通の人には、そんな経験、一生に一度も無いでしょう。」



「そうだね、セックスしながらの排泄なんて、AVくらいだろうね。」

僕も、入ってるすぐ隣での、激しい流れが、あそこに伝わってきて、とつても気持ち良かったよ。」

「私も、自分のがギョウとと締つて、あなたがピクピクするのをあそこで感じたわ。二人とも特別な快感だったのね。」

「また、浣腸させてくれるかな。今度は、入れたままじゃなくて、僕の目の前で出して見せて欲しいな。」

「やだ、恥ずかしい。」

そんな会話をしながら、僕と彼女は眠りに落ちていった。

